

2018年度 都市環境デザイン会議 公募型プロジェクト

〈全国大会 2019 in 石巻・女川〉

プロジェクト発表 梗概

2019年10月18日・19日

発行：都市環境デザイン会議

プロジェクト発表プログラム

10月18日（金）：第1日目（前半）			備 考
14:00～ 14:05	趣旨・発表手順の説明（埴理事）		兼司会
14:05～ 14:25	発表①（中村 伸之） 川でつながる～自然とアートのまちづくり （ビデオ発表）		関西ブロック
14:25～ 14:45	発表②（柳田 良造） ローカル線の環境デザインセミナーⅡ		中部ブロック
14:45～ 15:05	発表③（上坂 達朗/新田川 貴之） 自然物が創る街の魅力に関する研究		北陸ブロック
15:05～ 15:25	発表④（茂手木 功） 夜の水彩カフェテラス ～水辺空間を舞台とした地域の文化創造実験～		関東ブロック
15:25～ 15:45	発表⑤（斉藤 浩治） 魅力再発見！東北酒蔵プロジェクト		東北ブロック
15:45～ 15:50	前半のまとめと後半の予告（岸田理事）		

10月19日（土）：第2日目（後半）			備 考
9:30～ 9:50	発表⑥（高見 公雄） 神々の国、妖怪の町の親水性 ～斐伊川の治水性能に着目して 水辺街づくりの可能性を展望する～		関東・中国ブロック
9:50～ 10:10	発表⑦（庵原 義隆） テニテオ TM ～まちの未来をつなぐ緑あふれる並木道を 描いてみよう～		中部ブロック
10:10～ 10:30	発表⑧（西村 駿/中嶋 響） 四国の都市環境デザイン 事例集とツアーモデルコース作成 高知県編		四国ブロック
10:30～ 10:50	発表⑨（林 靖之） 防府市中心商店街エリアの空地利活用による 都市環境整備プロジェクト		中国ブロック
10:50～ 11:00	総括 （谷口理事）		

注）各発表の持ち時間は、説明 13 分＋質疑応答 7 分＝計 20 分。

川でつながる～自然とアートのまちづくり

～芸大移転と高瀬川グリーンインフラ～

関西ブロック 中村伸之

1. 背景と目的

400 有余年の歴史を持つ高瀬川の環境保全と文化活動を通じて、京都市立芸術大学が移転する崇仁地域のまちづくりを行っている。

崇仁地域は江戸時代に起源をもつ被差別部落であった。京都駅に隣接する地域でありながら、人口減少・高齢化が進行したが、京都市立芸術大学移転で地域再生の可能性が生まれた。

高瀬川の自然、芸術、多文化共生という地域資源を活かして、地域のアイデンティティの再構築＝魅力づくりが求められる。

2. 事業内容

活動場所：京都市下京区崇仁地区と高瀬川（京都駅東部）

①子どもたちと水の生きものを調査し、アート作品を制作し、展示した。（写真下）

・児童館の子どもたちと高瀬川の水の生きものの調査をし、20 種以上の生きものを確認した。

（協力：京都府保健環境研究所）4 月 7 日。参加者：約 40 名。

・児童館の子どもたちと水の生きものを採集して、京都市立芸術大学の教員や学生の指導で、スケッチブックや大きなビニールシートに生きものの絵を描いた。8 月 4 日、9 月 1 日 2 回実施。参加者約 40 名×2 回

・元・崇仁小学校で開催された「川デツナガル」イベントの中で「水の生きものでアートする」を展示した。11 月 3 から 5 日。観覧者約 3000 名。



②差別と闘い皮革産業を興した、地域の歴史を語る、明治時代の石造物（灯籠、石碑、石仏）を移設保存し、その展示や活用を話し合うワークショップを開催。3月2日。参加者9名。

③菊浜・東九条の高瀬川保勝会と連携してシンポジウムを開催し(1月26日実施。参加者約50名)、そこでの提案を「京都駅東部エリア活性化将来構想」のパブリックコメントに提出し、今後の事業に発展させるためのアイデア出しのワークショップを開催。3月2日。参加者9名。

④台湾・台中市の台中文史復興組合・張翰文 Chang Han-Wen 氏を招いて、川デツナガル・国際セミナー「台中市旧市街地に学ぶ都市再生 ～コミュニティデザインセンターと若者の活躍」を開催。10月6日。参加者10名。

3. 得られた効果

芸大と連携した創造的なまちづくりのきっかけとなり、地域間や芸大とのつながりが京都駅東エリアの文化力を高めることができた。

川そうじや生きもの調査で、こどもたちが遊ぶ清流のイメージが広まり、ゴミのポイ捨てが抑制され、ヘドロの量が減った。

各団体の既存の活動がコラボすることで、無理なく京都駅東エリアのエネルギーを盛り上げることができた。

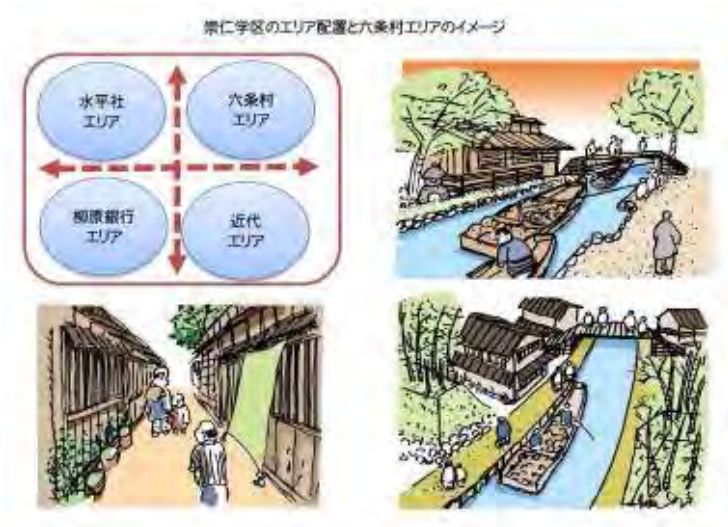
川そうじ、生きもの調査、河川整備、学童保育、高齢者サービス、芸大移転、高瀬川音楽祭、東九条マダンなどとの連携ができた。

詳しくは、崇仁高瀬川保勝会ホームページをご覧ください。

<https://www.sujin-takase.com/>



シンポジウムでまちづくりのアイデアを話し合う



ローカル線の環境デザインセミナー II

中部ブロック 柳田良造・河崎泰司

はじめに

ローカル線とは都市部というより中山間地域を走るのどかな路線である。昨年のローカル線の環境デザインセミナー I では車の移動では気づかない・見えない場所と環境、車の移動ではふれることのない地域の暮らしや人との出会いがあった。ローカル線という交通手段を使い訪れるということは地域の空間、暮らし、歴史のトータルな文脈の中で地域の場所を体験することであり、車ではそれが断片化し、文脈を体験できないことを改めて再認識した。本プロジェクトは中部地域のローカル線を舞台に、環境デザインセミナー（ワークショップを含む）を開催しその魅力を探り、環境のあり方を考えるものである。ローカル線プロジェクトの開催を通して、ローカル線を含めた地域の歴史

や環境軸としての意味を浮き彫りにしつつ、地域空間としての環境づくりの可能性を再定立する。

ローカル線の環境デザインセミナー II

①春の豊橋鉄道と渥美半島を旅する

日 時：2019 年 4 月 6 日（土）

場 所：愛知県豊橋市、田原市、伊良湖岬

参加人数：6 名

第 1 回目のローカル線の環境デザインセミナーは 2019 年 4 月 6 日（土）に参加者 6 名で「春の豊橋鉄道と渥美半島を旅する」と題して行った。豊橋鉄道渥美線は大正 13 年（1924）に旧陸軍 15 師団（豊橋）の軍隊や物資輸送などを目的に建設された鉄道である。沿線には愛知大学（15 師団跡地）前駅がキャンパス正門にあり文字通り学生生活の

2019 ローカル線の環境デザイン I

■ 2019 年 4 月 6 日（土）2019 ローカル線の環境デザイン I ・豊橋鉄道

09:45 JR 豊橋駅集合
10:00 - 10:06 新豊橋 - 愛知大学前
10:10 - 11:00 愛知大学キャンパス（旧 15 師団本部建物他）見学
11:06 - 11:40 愛知大学前 - 三河田原
11:45 - 13:30 城下町田原町並見学（昼食）
13:30 - 14:22 田原駅前 - 伊良湖岬
14:30 - 16:00 伊良湖岬見学
16:03 - 16:52 伊良湖岬 - 田原駅前
17:02 - 17:36 三河田原 - 新豊橋
17:45 - 18:30 豊橋市内電車乗車
18:30 - 20:30 豊橋市内で懇親会後解散



春の豊橋鉄道と渥美半島を旅する

●豊橋鉄道渥美線

豊橋鉄道渥美線（あつみせん）は、愛知県豊橋市の新豊橋駅から田原市の三河田原駅までを結ぶ豊橋鉄道の鉄道路線である。渥美半島を縦貫する鉄道として計画され、大正 13 年（1924）に豊橋の師団口（陸軍第 15 師団・現愛知大学キャンパス）と城下町田原の三河田原間が開業した。のちに師団口から豊橋市街地までつながり、半島の西端伊良湖岬までの鉄道延伸も計画されたがそれは実現しなかった。渥美半島はもとも温暖で農業が盛んな地域であるが大きな川がなく、たびたび深刻な水不足を経験してきた。鉄道開通後、豊川や木曾川水系からの用水事業が地域の社会基盤工事として進んだ。渥美線には現在 1 車両にサイクルトレインも運行され、三河田原駅からは豊鉄バスが伊良湖岬方面まで連絡している。「菜の花まつり」が有名な農と美しい景観の渥美半島をめぐるローカル線の旅を、伊良湖岬までのバス、豊橋市内電車の旅とともに楽しむ。

核となっているほか、渥美半島の軸として旧城下町の田原市まで延びて半島の暮らしの基盤となっているのを確認できた。特に15師団関連の施設が大学、広大な都市公園、高校キャンパスなどの都市施設の基盤になっていることに改めて驚かされた。田原から鉄道延伸が計画された伊良湖岬まではバスの旅になった。また豊橋にもどって、市内に残る路面電車にも乗車したが、この電車路線もかつては豊橋鉄道渥美線とつながっていたこともわかった。

ローカル線の環境デザインセミナーⅡ

②伊賀線と初瀬街道を旅する

日 時：2019年5月2日（木・祝）

場 所：三重県伊賀上野市

参加人数：7名

第2回目は2019年5月2日（木・祝）に参加者7名で「伊賀線と初瀬街道を旅する」と題して行った。伊賀線は伊賀盆地を南北につらぬき、北では関西本線に、南では旧初瀬街道、近鉄と交差する鉄道である。10連休の真っ直中、名古屋からの近鉄はごった返していた。青山高原を過ぎ、青山町

駅に着く。駅から歩いて木津川を渡ると初瀬街道の宿・阿保（あお）である。阿保の町並は格が高く、老舗の酒蔵、江戸期から続く料理旅館など魅力にあふれていた。再び電車に乗り伊賀神戸で伊賀線に乗り換え、伊賀上野をめざす。広小路駅あたりから狭い市街地の間を通り抜け上野市駅に着く。駅は旧上野城、商業エリアの核になっており、丁度伊賀忍者にちなんだイベントが行われており、あちこちに忍者スタイルに変装した子供や大人もいる。伊賀上野の町並・商業ゾーンは質が高く活気があり、懇親会の会場になった老舗の伊賀牛の金谷など立派な町家が續いていた。懇親会后、再び伊賀線、近鉄で名古屋に到着、魅力的なツアーも解散となった。



2019 ローカル線の環境デザイン 2

伊賀線と初瀬街道を旅する

■ 2019年5月2日（火・祝）	
08:50	近鉄名古屋駅集合
09:00～10:36	近鉄名古屋駅から青山町駅へ移動
10:40～12:00	青山町初瀬街道を歩く
12:00～13:00	初瀬街道の「伊勢慶」で昼食
13:20～14:01	青山町から伊賀神戸経由上野市駅まで移動（伊賀線乗車）
14:15～16:45	伊賀上野市街地と町並み（伊賀街道沿い）見学
16:45～18:30	伊賀街道の「金屋」で懇親会
18:37～20:38	広小路駅から伊賀神戸経由近鉄名古屋駅へ移動後解散

伊賀線と初瀬街道

伊賀上野駅から伊賀神戸駅を結ぶローカル線である。伊賀上野駅からはJR関西本線とつながり、伊賀神戸からは近鉄大阪線とつながるよう、東西方向の両幹線を伊賀上野地域で南北につなぐ路線である。2007年10月1日に近畿日本鉄道（近鉄）から伊賀鉄道に運営が移管された。歴史的には、大正期にまず伊賀上野市街地中心部（伊賀市駅）と関西本線を結ぶ線として生まれ、その後数年後まで延び、参宮急行電鉄（後の近鉄路線）と結ぶ。伊賀上野は旧伊賀街道沿い等、魅力的な町並が残る市街地がある。また伊賀神戸駅から近鉄大阪線の一つ目の駅である青山町駅周辺も、古代から大和と伊勢神宮を結ぶ街道であった初瀬（はせ）街道が通り、歴史的遺産が豊富である。初瀬街道とは奈良県桜井市の初瀬と三重県松阪市六軒を結ぶ街道である。壬申の乱の際、大海人皇子も通ったと言われる重要な街道であり、比較的平地の多い道であった。今回のローカル線の環境デザインツアーはローカル線に乗ることに加え、歴史的町並りと伊賀肉すき焼き名店「金屋」（伊賀上野）、「若戎酒造」と「伊勢慶」（青山町）など、食の楽しみも満載である。

青山町の町並と名店



若戎酒造

伊勢慶（若戎酒造の酒と創作料理）



■ 2019 年 6 月 8 日 (土) 2019 ローカル線の環境デザイン 3・養老鉄道

09:50 桑名駅集合

10:05 - 10:19 桑名-多度

10:30 - 12:15 多度大社見学 (レンタサイクル・昼食)

12:19 - 13:13 多度一大垣

13:25 - 13:49 大垣一揖斐

13:50 - 15:00 揖斐川町の町並見学 (レンタサイクル)

15:15 - 15:40 捐斐一大垣

15:45 - 17:30 大垣市内見

17:30 - 19:30 大垣市内懇親会

20:00 大垣駅解散



初夏の養老鉄道を旅する

●養老鉄道

揖斐川流域西側を縦断する路線で、岐阜県と三重県を直結する唯一の鉄道路線である。多度駅から美濃高田駅までは養老山地の麓を走る。養老山脈の麓は濃尾平野に向かって扇状地が広がる地域で、扇状地によく見られる水無川や天井川が見られ、鉄道路線が川の下をトンネルでくぐる箇所がいくつかあり、この路線の特色と言える。

歴史的には、四日市港と敦賀港を結ぶ鉄道敷設を計画した四日市の市島茂作は三重県へ岐阜卓郎の沿線の有力者を説き及ぼし、その賛同を得て出した鉄道敷設願いに対して1897年（明治30年）に仮免許が下付された。しかし沿線の利害関係（当時は揖斐川、牧田川、水門川の舟運が盛んであった。また大垣以北の誘導河もあった）や不況もあり実現の目処がたてなかつた。1911年（明治44年）に再び井島は地元出身である立川勇次郎（大垣出身の実業家で京浜急行電鉄や揖斐川電力（イビデン）初代社長）に養老鉄道建設に参画するよう依頼した。立川が社長となり（初代）養老鉄道を設立し、1913年（大正2年）7月に養老・大垣・池野間が開業することとなった。用意した車両はすべて中古車で鉄道院より機関車5両、南海鉄道より客貨車を購入した。また養老公園の整備や養老ホテルの建設を行った。

第二期工事となる桑名 - 養老間、池野 - 揖斐間は1916年（大正5年）に工事に着手したが、第一次世界大戦勃発のため資材が高騰した。このため工事は遅れ1919年（大正8年）4月に全線開通となり、養老線の総延長は56kmとなった。

沿線には多次大社や養老の滝などの名所が多い。途中にあるJR東海道本線・特見駅直り換え駅の大垣駅は、桑名方面と大垣方面との線路が合流するスイッチバック形の配線となっている。

都市環境デザイン会議・中部ブロック



JUDI 中部ローカル線の環境デザインセミナーⅡ ③ 初夏の養老鉄道を旅する リーフレット

③ 初夏の養老鉄道を旅する

日 時：2019 年 6 月 8 日（土）

場 所：三重県桑名市、岐阜県養老町、大垣市、
揖斐川町

参加人数：10 名

第3回目は2018年6月8日(土)に「初夏の養老鉄道を旅する」と題して、参加者10名で初夏の好天に恵まれ行われた。桑名駅に集合し、養老線乗り放題の一日切符を購入。乗車後、最初は多度駅でおりる。多度大社の参道駅であるが神社までは登り道で2kmほどあるので駅のレンタサイクルを借りる。レンタル料金は100円、電車に乗せられ、しかも他の駅での返却も可能とのこと。非常にいいシステムだが残念なことに6台しかない。4人が自転車を利用し、他の6名は歩くことに。自転車チームは天井川の下を線路がくぐる珍しい風景の中、揖斐川沿いを2駅間走った。徒歩チームは養老駅を下車し、養老の滝見物を行った。断層帯である養老山地と電車路線の文脈が良く捉えられた。大垣駅でスイッチバック経由し、終点の揖斐駅まで楽しい旅になった。大垣で懇親会後解散。

今企画は中部ブロックからだけでなく、東北、関東、関西のブロックからの参加者を得て、楽しいプロジェクトとなった。また戻ってからの分析では、地域の文脈なかでローカル線を捉える作業も行うことができた。



まとめ

ローカル線という交通手段を使い訪れるということは地域の空間、暮らし、歴史のトータルな文脈の中で地域の場所を体験することであり、車ではそれが断片化し、文脈を体験できないことを改めて再認識した。本プロジェクトは中部地域のローカル線を舞台に、環境デザインセミナーという旅を開催し、地域の文脈の中で、その魅力を探り、環境のあり方を考えるものであった。

沿線の歴史や地勢を調べ、ローカル線に乗り、地域を歩けば、次々と新しいものが見えてくるという楽しい発見と地域の暮らしと人との出会いがあった。

この2年連続の企画を通して、文脈の中で地域を考えるということの、ポイントが見えてきた。

豊橋鉄道では、二つの城下町と旧街道、乏水性の原野、軍都の出現、教育施設と緑地のキーワードが抽出できた。

ローカル線ではその地域の暮らし、産業をささえるインフラである。今回は豊橋地域の特徴でもある、乏水性の原野に引かれた豊川用水には直接触れていないが、明治以降鉄道インフラと水道インフラが密接にからみあい、地域の暮らし、活力を生み出していた。軍都豊橋の遺産は現在、大学・高校のキャンパス、緑豊かな公園となり、大きなスケールは驚きを与えるものである。そこに、豊橋鉄道渥美線や市内の路面電車もからんでいるという事が、豊橋の地域の姿を特徴づけるものである。

伊賀線では、伊賀城下町、街道と宿、伊勢への道、産業の近代化と輸送、食文化のキーワードが抽出できた。のキーワードが抽出できた。

伊賀線は大正期に伊賀上野市街地中心部（伊賀市駅）と関西本線を結ぶ線として生まれ、その数年後名張まで延び、参宮急行電鉄（後の近鉄路線）と結ぶ。この二本の鉄道とつながる意味は、次の文脈で捉えられる。関西本線と結ぶ意味は、伊賀地域北部は粘土の産地であり、伊賀焼の近代化で生まれた建築用テラコッタを関西本線を使い近畿に運ぶことであった。参宮急行電鉄の駅周辺は、古代から大和と伊勢神宮を結ぶ街道初瀬街道の宿であったように、伊賀か

ら伊勢への鉄道のルートをつくることであった。

伊賀城下町の構造から電車の路線は伊賀市街地の真ん中を通り敷かれ、広小路駅などは民家のすぐ横を通。伊賀市街地が現在も中心部が賑わいを有するのにはこの鉄道位置も関係しているように思われる。伊賀市街地は魅力的な町並とともに、食文化の宝庫でもある。この食文化は初瀬街道の宿（阿保）ともつながりがあることが今回の旅での発見であった。

養老線では、養老断層、伊勢街道、伏流水と水運、電力、産業起し、食文化のキーワードが抽出できた。

電車を走らせるには、膨大な量の電力が必要である。当初発電所を作る上で、電力を販売するにも、まだ民間での消費があまりなかった、せっかくなので電力を余すことになるので、電力会社とセットで鉄道会社を持つという事が多々あった。養老鉄道もそのような時代背景に、揖斐川上流に発電所をつくり、四日市からの輸送経路、当時の化学工業、原料や製品輸送の目的、繊維産業の労働者確保の為に鉄道輸送という事での地域産業の展開の軸としての鉄道事業であった。揖斐川上流の発電所はのちにイビデンとなり、地域の核となる事業所に発展する。養老山地は断層帯の褶曲山地である。その地形的特色が天井川の下鉄道路線や、鉄道開発での観光地づくりで有名になる養老の滝などに、見ることができた。養老山地麓はまた伊勢街道のひとつでもあった。多賀大社と参道の老舗料理屋はその質の高さで街道の意味の重要性を今に伝えていた。

養老山麓は濃尾平野を流れてきた揖斐川、長良川、木曽川が地形にそって集まってくる場所でもある。養老から北のルートはこの川と水、鉄道の関係が見えるかたちでわかる場所でもあった。旅の最後の懇親会は、伏流水の豊かな城下町、水都大垣での楽しいものになったことを記して終わりにしたい。

自然物が創る街の魅力に関する研究

北陸ブロック 鏑 隆弘、上坂達朗、新田川貴之

はじめに

近世の版画が示すように、土地の魅力を作る景観的要素として人々の生業や行事と共に、背景となる太陽、月、山、川、海、森など様々な自然物が取り上げられてきた。都市が「発展」した現代においても、連続する建物のスカイラインを強調する満月、家並みを映しながら落葉とともに流れる川面、細い通りの先に明るく光る雪山などのように自然物と人為が作る美しい風景は見られると思われるが、都市の資源や魅力として大きく取り上げられることは少ないようである。ここでは通りや庭園などそれら空間の外部に拠り所となるものとして何があるか、またそれらが持つ魅力について検討することで、それら空間について理解を深めることを目的とし研究調査を行った。

2018 年 11 月 24 日北陸ブロックのエキスカッションを兼ねて、金沢市内の候補となる視点場を歩き、眺めの中の自然物の価値を参加者の間で共有した。また同様な眺めを持つ場での眺めを持ち寄り、検討を進めた。



金沢市の事例

1. 樹木・樹林

1-1 西別院前

別院の塀の道路側に松が列植されている。塀

は道路から 1 m ほどセットバックして設置され、道路との間が松の育つ植栽帯となっている。松の間隔は 3m 程度の密なもので、根本には苔が生育し、普通に見られる街路樹に比べ緑の濃い空間を形成している。道路沿いの眺めとして、並木の背後に塀が見える形となる。直線的で単調になりがちな塀の形を並んだ幹が分割し、周辺の住宅のスケールに合った眺めを形成している。また樹冠が作る柔らかなスカイラインは街中の直線的で堅い雰囲気緩和している。

特徴：並木



1-2 下新町

西から東に向かって眺めた際に、通りの先が橋場町に向かって低くなり、道の先が見えなくなっている点が特徴的である。突き当たりには卯辰山の斜面の緑が見える。両側の家並みのボリュームと連続するような高さに稜線が見え、通り空間との連続性を感じさせるものとなっている。特に午後は山の斜面に日が当たり、通り内の暗さとは対照的な明るさで見通しの焦点を飾っている。

特徴：樹林 山の斜面



晴れの日の日中



晴れの日の夕方

1-3 お堀通り

東から西に向かって眺めた際に、尾崎神社の境内に生育する大きな樹木を眺めることができる。通りの左側は大手堀の緑地で、緑量は大きいものであるが北側に面しており一日を通して陰を見せている。突き当たりの樹木はこの緑と対照的に、午前は順光でその姿をはっきりと見せている。午後からは逆光ながら枝葉を通る光がそれらの形を強調して樹木の存在を浮かび上がらせている。左側の暗めの緑は、突き当たりの樹木と連続したものとして捉えることもできるが、突き当たりを際立たせる背景として効果的に機能している。

特徴：樹木 緑地



1-4 尾崎神社前

西内惣構付近から緩やかな上り坂の先に境内の樹林を望むことができる。樹木は神門と社を取り囲むように生育し、通りの突き当たりにシンボリックな形を形成している。視点場周辺は緑の少ない環境であり、樹林の存在を際立たせている。特に午後遅い時間は、視点場の辺り

が建物の陰に覆われ暗くなり、神社辺りだけが日に照らされる。焦点が明確で印象的な眺めを形成している。

特徴：樹林 境内



1-5 尾山神社前

文化ホール前の広い通りの先に境内の樹林を望むことができる。神社及び神門は明治に作られ、道路は江戸時代からのものが平成に拡張されている。これらにより背の高い神門と背景の樹林に向かう参道の眺めが作られた。視点場付近西側の道路は近年拡張され、参道としての眺めの奥行きが深くなった。周辺は緑の少ない環境であり、樹林の緑量ある眺めは参道の眺めの魅力を深めている。

特徴：樹林 境内



1-6 寺町通

蛤坂入口の交差点から野田山に向かってまっすぐ伸びる寺町通りに、松月寺の大桜と長久

寺のケヤキが張り出している。無電柱化の整備後に大きく目立つようになった。車道にはみ出していることにより、見通しを遮る形となっているが、枝下部分では通りが奥に伸びる眺めを確保しており、二つの魅力を持つ道路景観を形成している。また両方とも落葉広葉樹であり、花や紅葉、落葉の季節的な変化が大きく、単調となりがちな直線の通りに豊かな表情を与えている。

特徴：樹木 境内



2. 山の斜面

2-1 兼六園

園内の霞が池周辺からは東に向かって眺望が開けており、卯辰山の斜面が園の借景となっている。午前中は東からの光で園内が明るく照らされ、遠景となる卯辰山斜面は若干暗めの見え方となる。午後からはその遠景部分に日が当たり、兼六園の視点場となるあたりは樹木の陰で対照的に暗い様相となる。手前近景の作りが兼六園のしつらえとしてしっかりしており、成り立つ形である。一日の中での光の変化が大きな特徴となっている典型的な借景の形である。



午前～午後



午後～夕方

竹沢御殿の存在した際は、領主の居間の庭は曲水と七福神山を手前の景として卯辰山が借景となる庭園となっていたといわれている。その当時、一般人は卯辰山へ登ることが許されず、また隠れることができないよう低木だけが育つように管理されていたと伝えられている。御殿の借景庭園とした場合、遠景はどんな見え方であったのだろうか。現在のように季節的变化を見せる落葉高木を中心としたものと異なり、サイズとテクスチャの細かい植生が実際よりは遠くに見える遠景を見せていたのではないかと思われる。

特徴：樹林 山の斜面 庭園空間

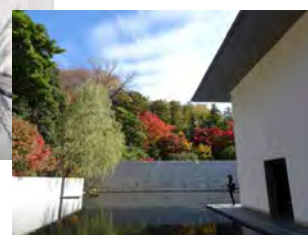
2-2 鈴木大拙館

館にある池の西側から建物越しに本多の森の斜面を眺めることができる。左側の塀、正面の御影石張りの大きな壁、思索空間の壁と軒が斜面の樹林を直線的な形で切り取って見せている。手前の池には背後の樹林が映り込み、自然の形のボリュームを増幅して見せている。直線にこだわった施設形態が、斜面樹林の自然性を強調している。

特徴：樹林 斜面 水



新緑の季節



秋

2-3 八坂

坂の上部から浅野川の谷越しに卯辰山を望むことができる。坂の右側は寺院の樹木、左側は宅地の緑が坂道を挟み込み、切り通しのように谷の家並みと卯辰山へ視線を誘導する。人為的な形である坂の軸と直交するように卯辰山斜面の緑のボリュームが水平に伸びており、対比的に斜面の自然林の存在を強調している。

特徴：樹林 山の斜面



3. 山

3-1 広坂

しいのき迎賓館から宮内橋方面に向かう通りの先に倉ヶ岳（標高 565m）を望むことができる。通りは無電柱化され、眺望を遮るものは無い。通りが南に向かって下がっていることや視線の途中に大きな建物が無いことで、それほど高くない山の斜面もよく見え、山らしい姿を見せている。眺望は通り両側の緑に縁取られ、近場の空間と山との連続性が形成されている。

特徴：山 街路樹



3-2 豎町

片町から入った地点から天狗の広見（現在の三口新線の交差点）向かう見通しの先には大笠山（標高 1822m）が聳える。見上げ角度は5度に満たず、目を動かすだけでその頂を捉えることは可能である。通りの幅が狭く両側の建物が

迫っていることで山容の見える量はそれほど大きくなく迫力はないものの、立ち並ぶ商業ビルの6mの高さに設置された大きな庇の作る水平線が視線を誘導し、それらと対照的な自然形を見せるこの山の存在感は大きい。

特徴：山



3-3 里見町

歴史的な雰囲気を見せる「こまちなみ」に選定された通りの先には、加賀富士と呼ばれる先の尖ったシンボリックな形の大門山（標高 1572m）が聳える。通りは無電柱化され、山容への眺望を遮るものは少ない。通り両側に並ぶ屋敷の敷地内に育つ樹木が通りに張り出し、自然の形が人為的な雰囲気を和らげ、自然形の山容と通り空間の連続性を形成している。

特徴：山 屋敷の緑



考察

今回取り上げた眺めの例では、次に示すよう

に幾つの特徴が考えられる。

① 焦点と視点場周辺の関係性

焦点となる自然物が存在し、それがしっかり見えるだけでなく、視点場付近の近景が連続や対比など焦点と意味のある関係を持っていることは、美しい眺めを作る重要な要素である。特に近景は眺める主対象を飾る背景としても機能し、そのしつらは大事である。



連続

対比



整備イメージ（現在整備中）

② 光の変化

自然物を見せる重要な要素の一つは自然光である。自然光は一日の中で、また季節によって変化する。眺めの中の対象物が順光、逆光によって表情を変えることは、見る人に物だけでなく時間を感じさせる。単なる美しい眺めでなく空間を感じさせる要素である。



天候による光の変化

③ 距離の違いによる自然物の捉え方

今回は焦点となる自然物として、樹木、樹林、

山の斜面、山容をとりあげた。これらはモノとして捉えると、樋口忠彦が「景観の構造」の中で解析したように樹木、樹林の見え方による近景、中景、遠景の分類の通りである。現代の物質主義的な都市環境の中でこれを見ると、遠景である山容の自然性が強調されるように思われる。

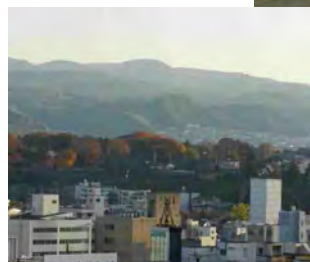
近景の樹木や樹林は、その生育について環境を含め人為によるコントロール下にある。中景の山の斜面（樹林）は、都市環境の人為的な圧迫は受けているものの手を入れにくい自然地形である斜面に自然な状態で生育している。遠景の山容は多くが手の入りにくい自然地であり、眺めの額縁となる都市の様相とは対極にある。都市の中から自然物を眺める人の捉え方としては、物理的な距離に加え、自身の自然への愛着の大小が影響し、遠景の自然性は強調されていると思われる。



近景の樹木・樹林



中景の山の斜面・樹林



遠景の山容

まとめ

城下町など近世までに形成された都市には、山、海、川に対する信仰や、宗教的、神秘的な信仰の形が反映されることが多かった。現代の都市においては、それらは無いといえる。大きな道路を通す際に景観的な魅力を都市周囲の自然景観に求めることもあるが、そこには信仰

に見られるような物語性は無い。



金沢城下図屏風の一部
(石川県立歴史博物館蔵)

また、人工の光のおかげで人為活動の制約が減り、一日における光の変化や季節の光の特徴など人々が感じる自然光に対する感覚も軽いものとなっていると思われる。これらにより昔に取り上げられた風景ほど魅力的とは言えないのではないだろうか。他の都市の事例も見ながら、魅力的な都市空間のあり方について研究を続けたい。



富山県射水市 立山連峰を望む内川
(新湊観光船HPより)



富山県南砺市井波 瑞泉寺参道

夜の水彩カフェテラス

～水辺空間を舞台とした地域の文化創造実験～

関東ブロック 茂手木功

2019年ゴールデンウィークの初日である4月27日（土）、曇り模様に時折雨が降る中、2017年に続き、2回目の“夜の水彩カフェテラス”が開催された。昨年も報告されているが、まずはこの経緯から説明させていただきたい。

水辺の楽しみ方の発見

江東区では地域の水辺を活用したイベントがいくつも開催されており、その日には2016年水彩フェスティバルが、小名木川と横十間川が交差するクローバー橋会場、旧中川・川の駅会場の2箇所で開催されていた。メイン会場のクローバー橋に行く人が多かったのか、そもそも川の駅周辺の住民の関心が小さかったのか、川の駅会場の人出は芳しいものではなく、私も暇を持て余していた。

ところが、日が暮れ始めると意外な光景に出会った。水彩テラス（現在の“SUI SAI BASE”（水彩ベース））前で、眼下の公園と川を臨みながら談笑し、飲食に興じる人々がいたのだ。何の装飾もない長机とパイプ椅子、明かりは足下に置いた小さなものだけと、空間的な演出は皆無に近い状態だったが、日中とは異なる表情を持つ場が生まれた。大人がお酒を飲みながら、雰囲気を楽しめる新しい空間的な価値を持ち得るのではないかと。

新しいチャレンジの第一歩

翌2017年9月、NP0法人江東区の水辺に親しむ会のメンバーを中心に、川の駅を舞台とした“夜の空間づくり・空間づかい”へのチャレンジが始まった。照明デザイン、ビデオインスタレーションのBGVによる効果を施し、暗さの中に身を置きながら飲食や場の雰囲気、さらには昼間では見ることができない川の様子を楽しむことを狙いとした。その結果、多くの方が訪れ、好評を得ることができた。また、思いの外子供も多く訪れ、夜釣りや生き物探し以外の夜の楽しみ方を発見してもらえたのではないだろうか。メンバーは、新しい

発見との出会いに手応えを感じ、今後の展開にも思いを馳せた。

地域を巻き込んだ活動文化の創造



旧中川・川の駅は、公園的に整備され、船付き場があり、水陸両用バスが川に進入するためのスロープが設置されている。軽食等を提供するにぎわい施設（“SUI SAI BASE”）もある。昼は散歩、釣り、カヌー等の水上スポーツが行われているが、夜の利用は極めて限定的である。



ここを舞台として水彩カフェテラス（以下、夜カフェという）を開催した。

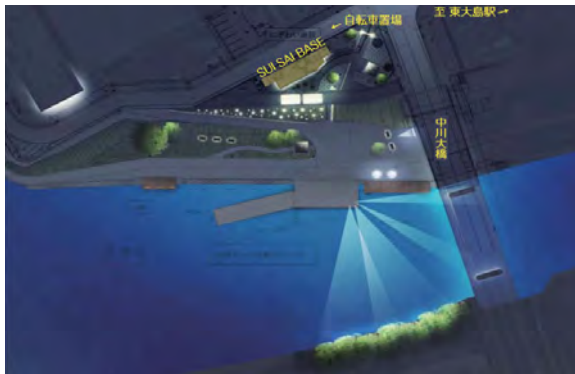
地域住民に楽しみ、参加してもらうことで、川の駅を舞台とした多様な活動文化が展開されるきっかけを仕掛けることを強く意識した。光（照明）の演出により日中とは異なる雰囲気を創出し、飲食を楽しみ、川を眺めてもらう。また、新しい試

みとして子供が参加する準備イベントを行った。

光の空間の演出

照明は、川の駅の斜面、四阿、樹木まわりに加え、対岸の公園を照らし夜間でも緑の存在を感じさせる演出を行った。

手作りの腰掛け等も配置し、その足下も演出することで、景色や飲食、会話を楽しんでもらった。



光のデザインによる演出



斜面、四阿、樹木等の照明演出

子供の参加型イベント

子供も夜を楽しんでもいいのではないかと、ところから、参加型イベントを行った。地域の保育園等に依頼し、魚のモニュメントを作成（色塗り）してもらい、直径 1.2m 程の円形クーゲルにぶら下げる。光の演出と共に川の駅に展示した。当日は、隣接する中川船番所資料館でワークショップを実施し、そこで作成したものも展示した。

展示後はモニュメントを持ち帰ってもらうことで、思い出としてもらう仕掛けである。

このほか、映画上演も行い、大人がお酒を飲み、おしゃべりに興じている間の子供楽しみも演出した。



子供達の手によるモニュメント

地元事業者・団体、企業の協力

前回に引き続き、地元の 2 店舗に出店いただいたほか、SUI SAI BASE にも時間外まで営業いただいた。既に触れた保育園等の協力に加え、広報活動、物品・設備の貸与等の面では、指定管理者、町会連合会、町会・自治会、商店街振興組合、江東区、文化センター、図書館、東大島駅等、地域の皆さんの協力を得ることができた。照明演出では、SD Lighting 株式会社に協力いただいた。

このように多くの方の協力を得られたことも今回の取組みの大きな成果の一つである。改めてお礼申し上げたい。

手応えとこれから

この夜カフェは、天候を考慮し一度順延している。さほどの雨でもなかったため、会場を落とすれる人もあり、中止を残念がある声が聞かれた。開催当日はやや気温が低かったものの、用意したイス、テーブルは順調に埋まり、多くの人が“そこに居る”姿が見られた。また、日が暮れてからの照明演出に対しては、多くの人に関心を持って貰えた。特に斜面の照明デザインは写真スポットとして子供達も大喜びだった。

催しとしては、地域住民の関心を引き、場の価値の認識を高めることに繋がったと考える一方、活動の持続性、関心度の維持、プレイヤー等で課題は散見される。

この先は、開催頻度、活動多様性も視野に入れる必要があるが、まずは地域の巻き込み、川の駅の指定管理者、船番所資料館との連携等、手探りながら、今後も着実に取組みを継続していきたい。

魅力再発見！東北酒蔵プロジェクト

編集総括 東北ブロック 斉藤浩治

(各章の執筆担当者は、見出しごとに氏名を表記)

1. プロジェクトの概要

1-1. プロジェクトの主旨

東北の酒蔵は小規模な生産体制が多い。厳選された材料（水、米、糶）と醸造方法にこだわりを持ち、蔵ごとに個性のある酒を生み出している。酒造りの要となる麹菌は蔵に住み着くために、関係者以外の立ち入りを許さない聖域のような印象を与える。しかし、近年は酒蔵見学を開催し醸造所をオープンにするとところも増えている。

酒造りという文化は、地域に存在する多くの要素との関係の上に成立するものである。このプロジェクトでは、酒蔵を地域の文化的ネットワークを形成する重要なノード（節点）と考え、酒造りに関わる人と地域との関係を紐解くことに取り組む。

1-2. 活動の視点

このプロジェクトにおいては、文化的コモンズ※に着目した活動を展開する。（※地域共同体の誰もが自由に参加できる文化的営みの総体を文化的コモンズと呼ぶ。）

文化的コモンズは、地域の活力の創出に極めて重要な役割を果たすものである。地域のアイデンティティの確保、地域における自治の基盤を行政と住民がともに形成するものとして、理解や共感が広がっている。また、社会の複雑化に伴い、文化活動そのものだけでなく、教育、福祉、観光、産業などとの連携により多様な文化的コモンズが形成され、それが地方の活力を生み出している。

特に、東日本大震災における地域ごとの復興活動が契機となり、地域の共同体のアイデンティティを形成するものとして、なくてはならないものと認識されるようになっていく。

2. 福島県桑折町の酒蔵を訪ねて

2-1. 桑折町「辛口桑折を楽しむ夕べ」

桑折町は、福島県最北の伊達郡に位置し、江戸時代以前から奥州街道と羽州街道が交わる要所として栄えた。江戸時代には半田銀山が隆盛を極め、長く幕府直営の御直山として経営された。明治以

降は産業振興と教育に力を入れ、人材輩出の町として存在感を高めてきた。

この歴史ある桑折町において、火入れ前の新酒「辛口桑折」を楽しむ貴重な機会に参加することができた。「辛口桑折」は地元有志の「醸会」が企画し、桑折町で作る酒米「夢の香」と、地元の湧水「金剛水」を使った桑折町の日本酒であるが、醸造は喜多方市の蔵元「大和川酒造」に委託している全国でも稀有な酒造りである。

この催しは、関係者並びに桑折町住民のための特別な席であり、参加者も約 60 名に限定される。今回は、東北ブロック伊藤登氏のコーディネートと「醸会」のリーダー渋谷浩一氏の特別な計らいにより、JUDI メンバー 9 名の参加が実現した。

◇日時：2018 年 12 月 15 日（土）

◇場所：割烹 仙台屋

◇参加者：〔東北 B〕 斉藤浩治、伊藤登、栗原裕
〔北陸 B〕 水野一郎、埴正浩、上坂達朗、高永智恵
〔関西 B〕 工藤勉 〔関東 B〕 小川隆典



「辛口桑折を楽しむ夕べ」の様子

2-2. こだわりの酒造り（北陸 B 上坂達朗）

桑折町の酒造りは、営利を目的としない取り組みのおもしろさがある。地域住民の「企画」による地酒づくりを通して、地域住民の交流と活性化が図られているだけでなく、地域ブランドとして成長している極めて珍しく、愉快で先進的な地域づくりである。

なによりも酒造りへの「こだわり」が面白い。仕込み水は桑折の地に育まれた地下水、その水は

延命水と口伝えに伝わる中硬水の「香村金剛水」である。酒米は福島県が誇る「夢の香」を採用し、銀山で栄えた半田山麓の寒暖に差がある土地で、地元農家に栽培を依頼している。

これらの材料を喜多方市大和川酒造へ運搬し酒造りを行っている。たとえ輸送費がかかろうとも地域の水と米にこだわった酒造りと、桑折醸会の人たちの熱い思いが美味しい「辛口桑折」を生み出したと言える。販売本数をさらに増やせばと言う意見もあるなか、背伸びせず、身の丈に合った酒造り・地域づくりを進めている。

町内には、かつての賑わいが感じられる歴史資源が散在し、数々の歴史秘話が潜んでいる。その歴史秘話をベースとした桑折ヒストリーに、桑折ブランドの酒・水・桃などの食をうまく結びつけることができれば、ますます魅力あふれる町へと発展させていくことができると思う。

2-3. 桑折町の文化的コモンズ（東北 B 伊藤登）

桑折の地名の起源は古代の役所を意味する「郡家（こおりや）」と言われる。中世には常陸国から国替えした伊達家が西山城（国指定史跡）を築き、その後 15 代に渡ってこの地を納めた。江戸時代には米沢の上杉領となり、藩財政立て直しの一環として新田開発のために西根堰（選奨土木遺産）が開削されたほか、奥州・羽州街道の宿場の整備、半田銀山の再開発、養蚕技術の改良など、桑折繁栄の礎を築いた。半田銀山や養蚕などの重要産業があったために、その後は幕府直轄領となり、代官による統治が行われることとなった。

半田銀山の隆盛は、代官所や半田銀山の役人の転勤、商人の出入りによる人の交流を促し、奥州街道を通じて全国の情報や文化をこの地にもたらしこととなった。和歌、国学、和算などの文化や学問、民芸品や工芸品、養蚕と製絹糸の技術など、小さな地域にあっても文化と経済は江戸並みに盛んであった。当時は、造り酒屋も 6 軒あったと言われている。

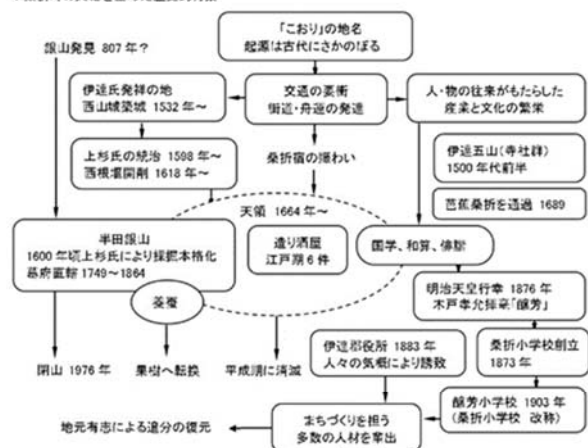
明治天皇の行幸に随行した木戸孝允は、揮毫「醸芳」をしたため、これがその後の小中学校名に受け継がれることとなる。福島県伊達郡の役所は隣町の保原にあったが、老朽化が著しく改修もままならなかった。そこで、桑折の篤志家が働きかけ、町民の寄付も集めて桑折に誘致、建設した。これ

が現在国重要文化財である旧伊達郡役所であり、桑折の町のシンボルとなっている。

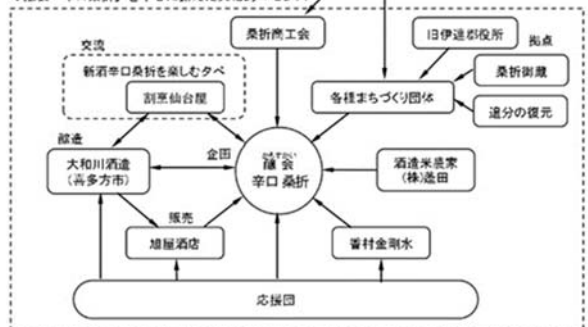
近年まで 2 軒あった造り酒屋は、いずれも平成の時代にその営業を終えた。それを無念と思い、地域の酒を希求する同士が集って「^{かもすかい}醸会」が誕生した。桑折の米を採求する酒造米農家の蓬田さん、地域では知らない者がいない金剛水を提供する日沼さん、地域で酒店を営む佐藤さん、料理屋を営む鈴木さん、そして藤倉さんや渋谷さんが協力して、「^{かもすかい}醸会」が辛口桑折を世に送り出すこととなった。製造は会津の大和川酒造である。その前当主佐藤弥右衛門に「会津の酒は女らしい酒だが、桑折の水と米で造った酒は男らしいキリっとした酒に仕上がる」と言わしめた、きわめて良質な酒に仕上がった。

次図は、桑折町の歴史的背景と今回研究した醸会「辛口桑折」を中心とした地域の文化的コモンズを表したものである。改めて整理してみると、奥州街道等を軸に展開されたさまざまな情報・文化の交流が底辺にあり、伊達郡役所を誘致した町民の気概、そして、醸芳小学校、醸芳中学校が輩出した多くの人材によって、今日の文化的コモンズが形成されていることに気づかされる。

◆桑折町の文化を生んだ歴史的背景



◆醸会「辛口桑折」を中心に脈した文化的コモンズ



3. 山形県鶴岡市の酒蔵を訪ねて

3-1. 大山地区「新酒・酒蔵まつり」

鶴岡市から車で15分の位置にある大山地区は、良質の米と水に恵まれた酒造りの街である。江戸時代には幕府の天領地として栄え、最盛期には30数軒もの酒蔵が街に賑わいをもたらしていた。現在も4軒の酒蔵が名酒を造り続けている。

毎年2月はじめに開催される「大山新酒・酒蔵祭り」は、その4蔵と出羽商工会が中心となり、地域ボランティアの支援を得て、酒蔵巡りと新酒飲み比べなど、街をあげたイベントが行われる。

JR特急「いなほ」もこの日だけは大山駅に臨時停車し、関東、甲信越など各地から愛酒家が訪れて、街はおおきな賑わいを見せる。

◇日時：2019年2月9日（土）

◇参加者：〔東北B〕 斉藤浩治、高谷時彦、栗原裕
〔関西ブロック〕 工藤勉
〔北陸ブロック〕 上坂達朗



大山地区「新酒・酒蔵まつり」の様子

3-2. 酒蔵をめぐる楽しさ（北陸B 上坂達朗）

その日、JR大山駅に降り立つと、祭りのはっぴを羽織った実行委員会のスタッフが出迎えてくれる。イベント会場のある街中心部まで無料送迎バスに揺られると、数分で「どまんなか商店街」に到着。既にまちなかは愛酒家であふれている。

まず向かった酒蔵は「大山」の銘柄で知られる「加藤嘉八郎酒造」（明治5年-1872 創業）。既に長蛇の列が待ち受けている。今は2月、時折舞う雪に身体を震わせ待っていると、スタッフが一升瓶を抱えて振る舞い酒をサービスしてくれる。しかも熱燗という心配りに感激しながら、2～3杯頂き気分は高まる。ようやく酒蔵に入り数種類の酒を飲み比べ。やはり新酒はどれも美味しい。

次は、酒蔵が軒を連ねたころの佇まいを色濃く残す「富士酒造」（安永7年-1778 創業）。たたみ上

げの大屋根切妻にぶら下がるスギ玉の青さが、新酒が醸し出されたことを告げている。趣深い建物内に入ると昔ながらの帳場を通り抜け広い作業場の土間へ。ここでも数種を試飲。さらに気分は高まる。続いて尋ねたのは「羽根田酒造」（文禄元年-1592 創業）。大山で最も古い酒蔵。こちらも古い佇まいで街の歴史を肌で感じる。

最後に訪れたのが「渡會本店」（元和年間-1615～23 創業）。新酒祭りも佳境を迎え、時間までできるだけ多くの酒を試飲しようと列は途絶えない。蔵に入ると日本酒記念館のような展示物の多さに圧倒されながら、数種類をしっかりと試飲。少し飲み足らなさがお土産を買う気にさせる。

今回、大山新酒・酒蔵祭りに参加して、まず驚くべきは参加者の年代が若いことである。今や日本酒は年代、性別を問わず愛されるようになってきたことがわかる。

3-3. 酒蔵を支えた職人集団（東北B 斉藤浩治）

大山の杜氏集団はその昔、現在の宮城県大崎市古川や、秋田県の湯沢市の方に、酒造りの指導をしたに行ったという歴史がある。また、秋田の湯沢や、福島の会津若松の末廣という酒蔵には、向こうから指導を依頼されて足を運んだと伝わっている。南部杜氏や山内杜氏から酒造りを学んで大山杜氏が生まれたのではなく、大山杜氏が後の彼らに酒造りを教えたということは驚くべきことだ。

酒造りのまち大山は「職人のまち」でもあった。かつては大工や左官、鍛冶屋など、職人町のようにそれぞれの職業ごとに集まって暮らしていた。大山には、職人たちが互いに情報や技術を伝えあって磨き合う気風があり、町全体で「大山酒」という統一的な名称で酒造し、「大山酒」の信頼を基盤として、情報と技術を高いレベルで共有していた。また、大山の水は鉄分が少なく酒造に適していたが、どこでもその水を汲み上げられたわけではなかったため、蔵人は質と量を求め、大山川を越えたり、加茂まで水を汲みに行ったりしていました。また、大山川の水運によって、酒造米の入手や酒の輸送が比較的簡単だったことも、理由の一つとして挙げられる。さらには、大山は幕領ということで酒税も優遇されており、幕府の権威によって、庄内藩の自領酒擁護政策との紛争解決が非常に有利だった。こういった人的、地理的、そ

して経済的な要因が、大山という一地方の酒造業を発達させたと言える。

3-5. キーパーソン聞き取り（北陸 B 上坂達朗）

鶴岡市のまちづくりに深い関わりがある3人のキーパーソンに聞き取り調査を行った。この貴重な機会は、地元の人材を良く知る下記の2名の方にコーディネートしていただいた。（敬称略）

- ・ 國井美保 株式会社庄内価値創造研究所 理事
- ・ 池田智子 東北公益文科大学大学院 高谷研究室 研究補助員

【粕谷典海氏】（出羽三山神社責任役員、理事）

- ・ 訪問日時：2019年4月20日（土）
- ・ 訪問場所：宿坊「三光院」（鶴岡市羽黒町手向）
- ・ ヒアリングの概要

現在の宿坊は30件。三光院のある「桜小路」に5～6件。昔から桜並木があった（昭和40年頃）ことからこの名前が付けられた。積雪は例年2mほどで冬は厳しい。冬期間、宿坊は休業し檀家周りをしている。千葉県を始め茨城など関東周辺や福島、宮城を回っている。これらの地域にも信仰は残っている。暦やお札を持ってPRしている。

街並み保存活動により最近徐々に雰囲気良くなっている。桜小路は昔の雰囲気をよく残しているエリアである。江戸時代からの建物も部分的に残っており、明治の廃仏毀釈の時に羽黒山から移築したものもある。



宿坊 三光院

全国から集まる修験者の修行は、8月26日～9月1日の1週間。羽黒山内の吹越竈堂を中心に、飲まず食わずの行で、夜は寝させてもらえず、護摩炊きで唐辛子などをくべて寝られないようする。厳しい行に耐えかねて途中リタイヤする人もいる。

【渡會俊正氏】（株式会社 渡會本店 代表取締役）

- ・ 訪問日時：2019年4月21日（日）

- ・ 訪問場所：株式会社 渡會本店（鶴岡市大山）

- ・ ヒアリングの概要

昔の酒造技術や設備では、軟水の場合、腐造が起りやすく酒造りに適していなかったが、大山は硬水のため酒造りに適していた。また舟運路が良く、生産量の7割弱を北前船で遠方へ輸出していた。北海道松前藩のころから北前船による交易があり、大山の酒は美味しいと評価が高かった。酒米は庄内地内のものを使用。仕込み水は地下水だが、水脈の幅が狭く以前は竹の管で引いていた。

大山の酒造りの衰退の原因は、明治維新後、天領としての好条件がなくなったこと、舟運から鉄道に代わったことと、他所でも酒造りが盛んになってきたこと、町の大火により多くの酒蔵が焼失したことなどが上げられる。

大山は酒造りに適した地であったため、酒造りに関わる道具等の商売も多くあった。酒米造りなど、酒蔵が農家を指導していた。蔵人は農家や漁師が冬期間手伝ったとされる一方、酒蔵を中心に構成された職人町の職人衆が携わったとするむきが強く、大山は蔵を中心とした町衆によって酒造りを行っていた。そうしたコミュニティが、この町の根底に今も根強く残っているものと思われる。

【相沢政男氏】（竹の露 合資株式 代表社員）

- ・ 訪問日時：2019年4月21日（日）
- ・ 訪問場所：竹の露合資会社（羽黒町猪俣新田）
- ・ ヒアリングの概要

創業は、安政五年(1858年)に羽黒の地 猪俣新田で初代金野岩治によりブナ林を開墾し創業された。竹林に囲まれ美酒を醸す酒蔵はいつしか竹の露と呼ばれるようになったという。地理的には、今野川、赤川、笹川に囲まれた扇状地。上流には金峰山、母刈山を控える。

酒米の「亀の尾」は、明治26年篤農家の阿部亀次が立谷沢川沿いの熊野神社付近で、低温に強い品種を発見しこれを育成した。現在の酒米の元となった品種である。これまで120にも及ぶ品種を民間で育苗してきた。江戸時代には庄内藩が指導し農民が協働で開発した。

2000年頃から地元米の改良を加える。優良酒米品評会、酒米研究会が改良振興し「美山錦」を開発、その後「出羽三山」、「出羽の星」、「雪女神」

を開発した。鶴岡は好適米の開発どころである。

3-5. 鶴岡の文化的コモンズ（東北B 高谷時彦）

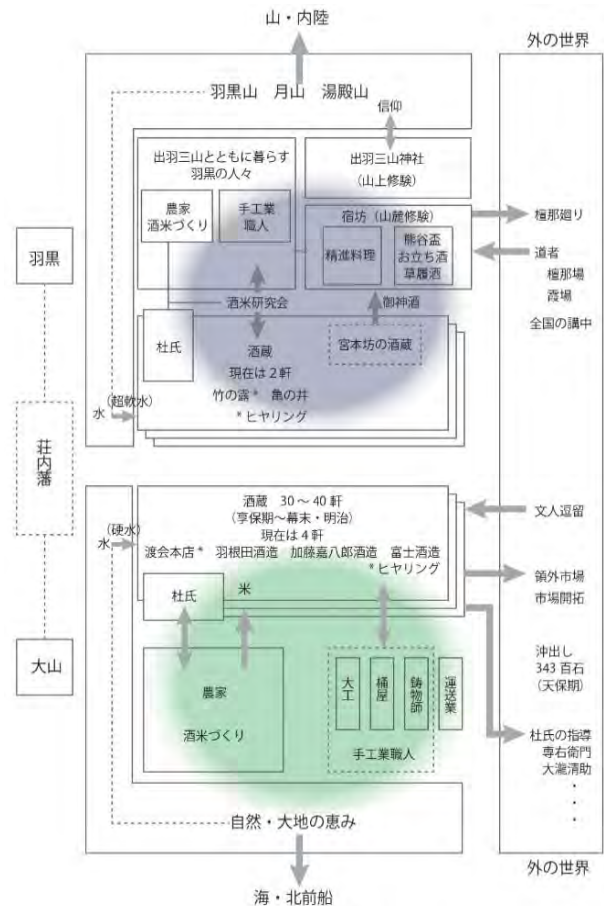
羽黒と大山は鶴岡市内にありながら、城下町鶴岡とは一味違う独自の雰囲気と気風に富んでいる。羽黒は羽黒修験の本山としての長い歴史をもち、多くの宿坊で賑わった江戸時代においても、荘内藩酒井家との微妙な力関係のもとに独自の宗教的文化圏を築いてきた。大山も江戸の一時期を除いて天領であり、酒造業を中心に経済的にも政治的にも荘内藩からは独立した文化圏を形成していた。

羽黒と大山という2つの文化圏を、酒蔵を中心とした文化的コモンズという観点から見取り図として整理したのが次ページの図である。

羽黒では海外に販路を広げる竹の露相沢社長からヒアリングしたが、相沢社長が第一に強調したのが地元羽黒の修験者（山伏）に供する御神酒のことである。基本的には神事に用いられるが、山伏の営む宿坊において、全国の講中から集まってくる道者（世俗の修行者）たちが、たしなむ熊谷盃などにも盛られたことと思われる（宿坊は基本的に飲み放題である）。その酒は、月山によりろ過された水を使い、地域の人々が品種改良を重ね育てた酒米をもとに、農家杜氏の手によって作られる。羽黒はまち全体で出羽三山信仰を支えているという誇り高い人々の住む場所であるが、その分かりやすい形が酒米の生産、杜氏の手作業、修験者への御神酒という流れの中に示されている。酒蔵および酒の生産流通のネットワークは精神的な意味で、地域の文化的コモンズをなしているといえよう。大山もまた、誇り高い町である。酒蔵は地域経済連関の要であるだけでなく、当主は地域の人々からも信頼される存在であった。このことは、ヒアリングに応じてくださった出羽の雪・渡曾酒造の渡曾会長がまちの要職をこなし、また地域の文化を伝える資料館を運営していることから分かる。また大山のメインストリートである浜街道（酒田道）の伝統的なまち並みの芯になっているのは、18世紀に創業した富士酒造の町家造りの建物である。遠来の文人墨客も酒蔵の御当主を訪ねてこられたことと思われる。

大山の基幹産業は変わることなく酒造業である。樽を作る桶屋や大工などの職人集団、酒米をつく

る農家などの要となってきた酒蔵は今も、地域の文化的コモンズとして人々が交流する場を提供している。



図版作成協力：池田智子

4. 終わりに

この活動の視点とした「文化的コモンズ」は、古い時代の「入会地」と同義として説明されることが多いが、それとは全く異なる概念として定義すべきだと強く感じた。

「文化的コモンズ」は地域の記憶と資源を未来につなぎ、新しい時代の個性豊かな「地域」を創る重要な役割を果たす考え方である。今後、この活動を更に続けることによって、その意味をより確かなものとして具現化したいと考えている。

以上

神々の国、妖怪の町の親水性

～斐伊川の治水性能に着目して水辺街づくりの可能性を展望する～

関東ブロック 高見公雄

■ プロジェクトの目的

このプロジェクトは2018年度に実施された「押しかけ理事会 in 松江・境港」のフォローアップを目的として立ち上げた。わが国の地方生活圏における人口減少の先にある新しい時代の住まい方について考えていくと、既に荒波が通り過ぎたこの松江・境港地域は、先進地域であるともいえる。この地域において、斐伊川というかけがえのない地域資源を活かした街づくりを考えることで、その可能性が見出せないかといった問題意識をこのプロジェクトは背景にもつ。なお、地域について見ていく中で、優れた地域資源であり水辺という切り口から強い関連性のある島根半島海沿い地域も検討の対象として加えることとした。

■ 地域の特徴と捉え方

なぜ、松江・境港地域か。着目したのは斐伊川の特徴であり、その沿川都市としてこの地域をとらえているが、そういった視点からより正確に言えば、出雲・松江・境港地域であり、本稿もその範囲を扱っている。ここでタイトルを「神々の国、妖怪の町の親水性」とした。出雲は日本神話の舞台であり、旧暦の10月は他の日本では神無月であるが、出雲のみ神在月と言う。全国の神々が出雲に集まるとの神話に基づき、集まるとされる社は、出雲大社、佐太神社、神塊神社などの名が挙げられている。出雲大社では古くから稲佐の浜で海水を汲んで、清め払う潮汲みという風習がある。このプロジェクトに加えた島根半島の漁村群には小さくとも歴史ある社があり、潮汲みをして参るという習わしがあることを知り、出雲・松江・境港地域を考える際、斐伊川沿川とともに、この島根半島地域も一体で捉える必要があると考えた。妖怪の町は現代的な話である。言うまでもなく、水木しげるの出身地であり、水木ロードを核に妖怪の町を謳っている。水木ロードはJudi 東北ブロック会員の栗原氏率いるオール Judi メンバーによ

りリニューアル整備が行われた。これを契機として必ずしも活動活発とはいえない中国ブロックの活性化を図ることもこのプロジェクトの狙いである。

■ 何をしたのか

このプロジェクトでは次のキーワードに基づき、各自がこの地域の着目点、資質、将来性を考え、これを持ち寄った。活性化の観点から、意見交換の場を持ち、水木ロードを見学しつつ懇親も深めた。

[キーワード]

- ・斐伊川、治水
- ・水辺、浸水
- ・出雲・松江・境港
- ・海、潮汲み、漁村



神々の国、妖怪の町の親水性について意見交換



夜の水木ロードを散策

[活動概要]

- ・2018年9月22日：電子メールにて会員間でプロジェクトの趣旨、目的、概ねの実施方針について確認。
- ・2019年5月25日：第1回の現地打ち合わせ（松江市にて。灘、高見）。
- ・2019年5月26日：島根半島現地調査（高見）。
- ・2019年6月25日：第2回の現地打ち合わせ（境港市にて。山崎、伊藤、寺本、越野、灘、高見）。各自の役割分担と原稿取りまとめスケジュールの確認。
- ・2019年10月19日：宮城県女川町にて開催のJudi 全国大会にて成果発表（高見）。

■ 項目、タイトル

各自以下のタイトルで地域の魅力と可能性について分析、検討することとした。

- (1) 地域の資質、着眼点と今後への期待
・・・・・・・・・・高見
- (2) 斐伊川治水事業の経緯と大橋川沿い
地域の街づくりの展望・・・・・・・・灘
- (3) 松江市 水辺再生の都市デザイン
・・・・・・・・・・寺本、越野
- (4) 大橋川拡幅事業と松江市中心市街地
活性化の今後・・・・・・・・山崎
- (5) 斐伊川水系の水辺・水面利用について
・・・・・・・・・・伊藤
- (6) 斐伊川河口・境港の街づくり
・・・・・・・・・・灘
- (7) 島根半島四十二浦の魅力と可能性
・・・・・・・・・・高見

■ 内容紹介・その1

「松江市 水辺再生の都市デザイン」

松江市で水辺に着目した都市デザインが構想されたのは「宍道湖・中海淡水化反対運動」の頃、1984（昭和59）年の「松江ウォーターフロント計画」がルーツとなる。その後湖のほとりの城下町という特徴を活かしたまちづくりが進められるのであるが、本稿では舟の活用と水系の連続性の問題を指摘している。10年ごとに開催される「ホーライエンヤ」は丁度今年5月に開催された。



10年に一度開催されるホーライエンヤ

今年のホーライエンヤは大橋川の中海側下流部から松江市街地を通り宍道湖の入口あたりまでのルートで開催されたが、昭和中期までは松江城内堀や斐伊川の支流である京橋川などを通り大橋川に出ていたとされる。現在大橋川とこれら水系との間の舟の往来は水門等の存在により不可能である。松江における水辺再生にあたってはこの問題を考える必要がある。もう一つは松江の中心とも言えるべき松江大橋の今後である。現在の橋は1937年に完成したコンクリート製の橋であるが、地元では常にその架け替えの話題がある。既存橋梁の架け替えは、仮橋の設置他両側の橋詰地域に大きな影響を与えるため、水辺まちづくりの観点からもその動向を注視する必要がある。

■ 内容紹介・その2

「大橋川拡幅事業と松江市中心市街地活性化の今後」



斐伊川水系の治水事業

大橋川は斐伊川水系にあつて、宍道湖と中海を結ぶ区間であり、現在の松江市街を南北に二分する形で流れている。斐伊川水系の治水は、中流部における大規模な放水路整備、上流部におけるダム建設とこの大橋川改修の3点セットとなってお

り、前2者は既に完成し、後は大橋川改修が残されている。

大橋川の改修が行われると、松江市のかつての中心商業地であった白潟地区において河川の拡幅が必要になるとともに、現在は無堤で地面と水面が極めて近い環境に対し、高さは低いものの堤防が造られることとなり、水辺まちづくりとしてはチャンスでもありピンチでもある。大橋川改修事業推進の鍵は、大橋川右岸・松江大橋の南詰めに位置する「白潟本町エリア」のまちづくりとの連動にあるとされており、これまでも様々検討調整がなされてきた。本稿は中心市街地のサポートマネージャーとして関わってきた立場から、その流れと今後のあり方をまとめたものである。



松江大橋から望む、拡幅計画がある白潟エリア

■ 内容紹介・その3

「斐伊川水系の水辺・水面利用について」



⑦斐伊川(中流域)に架かる潜水橋と花見の風景

島根県東部を流れるヤマタノオロチ伝説で知られる斐伊川は、実に豊かな自然や景観と共に、稀にみる多様な水辺空間（水辺・水面）利用がなされている。本稿では、以下にその現状の一端を紹介している。

- ⑦斐伊川(中流域)に架かる潜水橋と花見の風景
- ④トライアスロン大会；尾原ダムさくらオロチ湖
- ⑤河川敷ゴルフ場・・・出雲カントリー倶楽部

⑤サバニ艇庫と周辺、湖遊館（カヌー・ヨット教室・貸出）

⑥宍道湖東岸ウインドサーフィンと湖畔のジョギングコース

⑧ホーライエンヤ(松江市) (2019. 5. 18)

⑦宍道湖遊覧船「白鳥号」

⑦渡船（矢田の渡し）松江市矢田地区

⑧宍道湖のシジミ漁船 停留船小屋

⑧宍道湖グリーンパークの野鳥観察舎

⑨米子水鳥公園 野鳥観察舎

■ 内容紹介・その4

「島根半島四十二浦の魅力と可能性」



出雲国図(寛永10(1633)年 出典:松江市史

ヤマタノオロチ説話では、船通山系を源とする日野川、斐伊川、飯梨川、江の川、伯太川などの川、及びその支流を頭が8つある大蛇に見立てたとする説もあるなど、神話と関係性の深い川である。この地域自体、その成り立ちなどは全て神話との繋がりがあると言える。そのような地域に長く滞在する機会があり、当初はこの不思議な暴れ川とその沿川に着目していた。しかしながら滞在中で、さらにその奥にあるのは神話であり、それらが現在に形として伝えられる社の存在が重要であることに気づいた。そのような観点から地域を見た時、「島根半島四十二浦」というものが視界に入ってきて、この地域を知るには川沿いに加え、海沿いを合わせて見ていく必要性を感じた。



四十二浦マップ 出典:四十二浦巡り HP

島根半島四十二浦巡りというのは、1番とされる出雲大社（杵築浦）から42番美保神社（福浦）までの42の浦―漁港とその集落、にある42の神社に、潮汲みをして参るというもので、ホームページが造られ、スタンプラリーのような宝印帳が売られるなど、地元ではこれを振興しようという意志が見られる。ところが、出雲大社、美保神社といった観光地を除けば、他の社で巡り客と会うことは無い。

これらの小さな浦―漁港―集落は誠に美しく神秘的である。一例を示そう。28番津上神社（沖泊浦）である。



28 番津上神社(沖泊浦)

松江市の中心から北北東約 10 kmの位置にある漁村集落である。写真に見られる通り、集落の家々の屋根の多くは石州瓦で葺かれており、地域の自然風景にマッチして実に美しい。神社は海と集落を見下ろすやや高台にある。42浦を巡って思うのであるが、港―集落―神社の位置関係は様々であり、法則制は今のところ見つかってはいない。今後42の集落全てを横並びに比較、分析してその関係性を見い出していきたい。



28 番 沖泊浦の航空写真 出典：google

津上神社は現在の社名とされ、元は日御碕神社

と呼ばれていたらしい。現在祭られている神様は瀬織津彦神・瀬織津姫神であり、大日本神名辞典によれば、瀬織津姫神（セオリツヒメノミコト）とは「皇大神の荒魂にます一は八十枉津日神と申す（倭姫世紀）」と記されている。教養が不足して内容が理解できていないが、これに示されるように、この四十二浦を理解するには未だ多くの勉強が必要なのだと思う。また、25番日御碕神社など、道路脇にある簡素な社であるが、祭神は天照大神と書かれていて、びっくりする。神々の国なのだと思い、この地域に対する何故、なんでもを知りたい、と珍しく知識欲が沸いてきた。未だ緒に付いたばかりであるが、この四十二浦の調査、研究はしばらく続けていきたい。



25 番 日御碕神社(野波浦)

先に触れた通り、この神秘的な地域は県都松江市の市街地から車で数十分のところにある。松江で知り合った法政大学松江校友会の梅野氏は松江市街地に住んで、出雲市にある9番許津神社のある十六島（うつぶるい）に通勤している。全てとは言わないが42の集落の多くは、松江市の通勤圏と言って良い距離にある。

地域の核となる松江市は八岐大蛇の胴体とも言える大橋川（斐伊川の一部）を挟んであり、そして神々の国の海岸線に連なるこれらの浦は、これまでの役割からすれば神が守る漁村であり次第に消滅に向かうのかもしれないが、松江から至近の位置でこの神秘的な雰囲気、これからの時代の居住または活動空間として、再登板の可能性もあるのではないか、という期待を持っている。

（その他は略、以上）

テニテオⁿ

～まちの未来をつなぐ緑あふれる並木道を描いてみよう～

中部ブロック 庵原 義隆

■ 1. みんなの森 ギふメディアコスモス

平成 27 年 7 月 18 日、岐阜市に「みんなの森 ギふメディアコスモス」が開館しました。岐阜城で有名な金華山を望む敷地に位置する、図書館を中心とした文化複合施設で、開館以来、毎年 100 万人以上の来館者が集まる人気の建物です。

この建物は、周囲のランドスケープも一体として計画されました。その中でも特徴的なのが、全長 240m にわたる並木道です。



↑「ギふメディアコスモス」

■ 2. せせらぎの並木 テニテオ

建物の設計者である伊東豊雄さん（建築家）がランドスケープの専門家である石川幹子さんと一緒に計画したこの並木道には、『駅に向かう都市の軸を取り戻したい』という強い願いが込められています。

並木道の方向にまっすぐ 2 km 進んだ先には JR 岐阜駅があり、そこまでの間には、かつての間屋町や柳ヶ瀬商店街、行政地区や市民会館があります。

これらをつなぐ強い軸をつくることが出来れば、アパレルで盛んだった頃の活気が薄れてしまったこの街に、これからの時代に向けた、既存の街を活かした新しいネットワークを生み出せるのではないかと考えたのです。

「せせらぎの並木 テニテオ」と名付けられ、主要な樹木を「カツラ」としたこの並木道、実は新

しくなった隣の敷地の計画にも「カツラ」が採用されたことで、240m + α に延長されました。ひとつの計画の中で出てきた思想が、他の計画にもつながったのです。



↑せせらぎの並木 テニテオ



↑ギふメディアコスモス設計者選定プロポーザル時のコンセプト図

■ 3. テニテオ[®] (エヌジョウ)

このワークショップは、テニテオから駅までの緑の軸が本当に実現されたとしたら、どんな風景になるのか？を描くものです。

緑の軸が実現されれば、その効果は、掛け算を超えて、乗数のように豊かであろう、と考えて、タイトルをテニテオ[®] (エヌジョウ) としました。

具体的な手法としては、テニテオから JR 岐阜駅までをつなぐ「金華橋通り」の車線数を減らし (6 車線⇒4 車線)、そこで生まれた新しい敷地を歩き抜けることのできる並木道とすることで、緑豊かな、この街で暮らす人たちの為の場所をつくり出すことを目標としています。

これは、この街では、南北にのびる 3 本の主要な道路が近接していて、かつ、すべての車線が交通上有効に使われている訳ではない、ことにも着目しています。

また、市の政策としても、この通りに、緑を植え、快適な移動空間とすることを推奨しています。

■ 4. 他の地域の優れた並木道のリサーチ

毎回のワークショップでは、金華橋通りを参加者全員で歩くと同時に、他の地域の、街に根付いた並木道の事例をみんなで勉強しました。

特に、下記の 2 つの事例については、道路幅や車道の数、周辺建物の高さ、などが金華橋通りにとても似ていて、テニテオ[®]を具体的にイメージするのに役立ち、また、少し手を加えれば実現の可能性のあるものだ、と感じられ、勇気づけられました。

・仙台市「定禅寺通り」

全体の道路幅員 46 m、6 車線、総延長約 1 km。昭和 33 年に植樹された 4 列の樹木は現在では 20 m 以上の高さになりました。都市イベントの会場にもなって、まちのにぎわいに大きく貢献しています。

・スペインバルセロナ「ランブラス通り」

中央に幅 10 m の歩道。キオスクやあずまやが多く並び、街での生活の主役の場となっています。並木道のにぎわいにより、脇の車道を走る車も減速をされていて、快適で安全な場となっています。

また、ワークショップ途中で知った、「愛媛県松

山市花園町通り」の事例では、具体的な提案を何度も続けることで、設計に 7 年もの年月をかけて、「車道の一部を歩道に変える」ということがまさに実現されていました。



↑ 定禅寺通り



↑ ランブラス通り

■ 5. 第 1 回テニテオ[®]

【地元大学生とのワークショップ】

最初のテニテオ[®]は、岐阜市立女子短期大学の 1 年生・2 年生を対象とした、2 日間のワークショップでした。

打ち出された金華橋通りの航空写真を 10 のエリアに分け、1 人又は 2 人で、各エリアに思い思いの緑を模型で表現。

1 日目の午前中に街歩き、午後から模型製作、2 日目に講評会を開催。

全部の模型をつなげた時に、テニテオ[®]の全貌を、初めて視覚化することが出来、その後のワークショップへの第一歩となりました。

各エリアには、そのエリアならではの見どころを提案してもらいました。

・交差点の上の歩道橋広場

・地下水を利用した水路や畑の提案

- ・並木道の中のツリーハウス
- ・緑のトンネル

など、その後のワークショップにつながるキーワードが出てきました。

地元新聞社にワークショップの様子が紹介され、テニテオ[®]は多くの方々に知られることになりました。



↑ 第1回ワークショップ時の写真

■ 6. 第2回テニテオ[®]

【市民ワークショップ】

岐阜市立図書館分館の講座として開催。

募集で集まった子供から学生、大人まで、幅広い世代の市民の方々が集まりました。

1日間のワークショップで、午前中に街歩き、午後に模型製作+講評会。

第1回の内容をみなで勉強し、その中から選ばれた3か所について、より大きなスケールでの模型を製作。

並木の中に具体的な屋外の活動を考えることで、その周囲にも広がる活動の輪が具体的な提案となってかたちになりました。

特に、子供達のアイデアは無限大！並木をきっかけにして、まちじゅうを大きな公園のようにして楽しむアイデアには、テニテオ[®]にこの街を楽

しむ想像力がいかに重要かを感じさせられました。

完成した模型は図書館分館に展示され、幅広い市民の方々の目に触れることになりました。



↑ 第2回ワークショップ時の写真

■ 7. 第3回テニテオ[®]

【大学授業でのワークショップ】

これまで、数日の開催だったワークショップを、岐阜市立女子短期大学の授業の中で、時間をかけて行いました。

3週間、4回の授業、主に2年生が担当し、最終週は1年生も一緒に作業をしました。

時間をかけることが出来るので、下記のような目標を持った課題としました。

- ・通り全体を14個に分け、1人約100mを担当する。
- ・その中に、周囲の環境に呼応した、独自の機能を持つ「あずまや」も設計する。
(カフェ、足湯、地元の野菜売り場など)
- ・並木道床面の舗装も提案する。
- ・電動自転車やセグウェイなど、「新しい交通」の為の道も含めて計画する。

学生みんなの頑張りもあり、かなりクオリティの高い、「未来の並木道」が完成しました。

並木道のテーマとして、それぞれのエリアで下

記のような提案がありました。

- ・隣接する電力会社と協力した発電をテーマとした並木道。
 - ・近くのギャラリーと関連した屋外アート
 - ・ワークショップスペース
 - ・イベントも開催できる山や谷などの起伏。
 - ・古本市場
 - ・おもてなしトイレ
 - ・大人の秘密基地
 - ・地域の歴史を伝える展示スペース
 - ・樹木を増やし、育てる人たちの育成施設
- どれもが、実現の可能性のある素晴らしい案として、模型や図面になりました。



↑上記4枚 第3回ワークショップ時の写真

■8. これから、そして未来へ

その後、市民の方々や地元の知識人をメンバーとした研究会を開催中。(なかなかモチベーションを維持するのが難しいのですが、) いつかは研究の成果をサッシにできるとよいなと思っています。

このワークショップを通して、その地域にしか実現できない、必然性のあるまちの風景とはどんなものか、そして、それはどのように生み出せばよいのか？と様々な側面から考えました。

もちろん、街を変えるなんて、多くの人の協力が無いとできないし、実際にやるとなったらかなりのお金もかかってしまいます。もしやるとしても、実現に30年・50年かかってしまうかもしれません。しかし、その地域に根付いた豊かな場所をつくることが出来れば、これは街の大きな財産、そして心のよりどころになります。そしてその財産は、100年後・200年後に街を大きく変えているかもしれません。

そんな100年後の未来の街の為に、このテニテオ[®]で描いた世界が少しでも役に立てばよいなと思っています。

四国の都市環境デザイン

事例集とツアーモデルコース作成 高知県編

四国ブロック 高知工科大学

1. 背景

都市環境デザインは建築、土木、造園などの分野を超えた共同作業で成り立っており、複数の分野に対しての理解が必要である。多分野を学ぶために、事例調査では事前学習に多大な時間と労力が必要となる。

分野横断的に事例を取り上げた資料があれば学習や調査も捗り、より理解を深めることができる。

2. 目的

本プロジェクトの目的は、四国内に現存する建築物、土木構造物及び都市景観に関して、分野横断的に情報を掲載した資料集と見学ツアーのモデルコースを作成し Web 上で公開することである。

3. 作業工程

おもな作業工程は以下のとおりである。詳細は次項より記述する。

- (1) 事例収集とマップ作成
- (2) 現地視察とツアーモデルコース選定
- (4) リーフレット・ホームページ作成

4. 事例収集とマップ作成

書籍やインターネットから、高知県内に現存する建築物や土木構造物、文化遺産等の情報を収集し、以下の項目を整理した。

- ・ 名称
- ・ 緯度・経度
- ・ 参考文献、参考書籍
- ・ 種別

収集した事例の緯度・経度等を Google Map に落とし込み、事例マップを作成した。

5. 現地視察とツアーモデルコース選定



現地視察の際の集合写真

収集した事例を優先度の高いものと低いものに分類し、優先度の高いものから視察した。

調査員が現地視察をした事例の中から幾つかを選別し、見学ツアーのモデルコースを選定した。モデルコースは1日または2日をかけて回れるものとした。

モデルコースを選定する際のポイントとして主に以下の事項が挙げられる。

- ・ 調査員が調査をする中で興味を引かれたもの、見るべき価値があると感じたもの。
- ・ 高知県を地域で分けしたときに、選別された事例が一定数以上ある地域であること。
- ・ 見学に不向き（住居や病院など）でないこと、見学に特別な許可を要しないこと。
- ・ 付近への車両の駐車がある程度容易であるもの。

今回選定されたモデルコースは以下の通りである。

幡多編

- ① 熊井隧道
- ② 新四万十川橋
- ③ 四万十川橋
- ④ 麻生堰

奥四万十編

- ① 第二領地橋梁
- ② 早瀬の一本橋
- ③ 北川川
- ④ 梶原町

高知中央編

- ① 牧野富太郎記念館
- ② 浦戸大橋
- ③ 鏡川水道橋
- ④ 土佐神社

6. リーフレット・ホームページの作成

4 年間継続して行われた本プロジェクトも今回で四国を制覇し、締めくくりということでリーフレットとホームページのデザインを前年までのものから一新し、より見やすく使いやすいものにした。

6-1. リーフレット

リーフレットは幡多編、奥四万十編、高知中央編の3部で構成されている。

デザインの検討としては、「利用者自身が印刷して使う」「一目で情報を理解できる構成」という前提の下、A4 用紙3つ折りを採用した。

6-2. ホームページ

各県各モデルコースの紹介ページや各事例の紹介ページ、橋梁や建築などの分類ごとの事例の検索など利用者目線での便利さを考慮して作成した。また、文字よりも画像で目を引くようなホームページを心掛けた。

7. 今後の活動について

本プロジェクトは今回で四国を制覇し完成に至った。来期以降は中国地方の都市環境デザインマップ作成を計画している。



四国都市環境デザインマップ

香川県 / 愛媛県 / 徳島県 / 高知県



デザインマップとは



高知 奥四万十編 第三館地橋梁
kochi okushimanto daimeiyachidobris



高知 kochi



幡多編
hata



奥四万十編
okushimanto



高知中央編
kochichanou

タグから探す

河川
橋梁
公園
ダム
町並み
道・駅
港
産業遺産
建築・駅
建築・神社
建築・商店

参考サイト

LINK



香川 kagawa



諸島編
shotou



西讃編
seisan



東讃編
tousan



愛媛 ehime



東予編
touyo



中予編
chuyo



南予編
nanyo

[ホームページ](#) - [トップページ](#)

防府市中心商店街エリアの空地利活用による 都市環境整備プロジェクト

中国ブロック まちづくり防府 林 靖之

1. はじめに

山口県防府市は、山口県の中央部に位置し、自動車メーカーマツダの主力工場を擁す、人口約12万人の地方都市です。

古くは周防国の国府が置かれ、その当時から製造業が盛んであったことをうかがわせる地名が今に残されています。(国衙、鋳物師町など)

そして海岸沿いは江戸時代の干拓事業によって広大な平野が形成されましたが、当時の階が飲泉より内陸側を通る旧街道山陽道沿いに松崎天神(現防府天満宮)が904年に創建されると、そのお宮を中心に門前町が形成され、現在に至っています。

1989年に防府駅が開業すると、防府駅から防府天満宮を結ぶ地区を中心に商店街が形成され、1980年代にピークを迎えることになりました。



▲山口県内で初となるアーケードが昭和32年に建設された(昭和59年撤去)

しかしその後の商業環境の変化により、中心市街地の商業者は減少の一途をたどり、空店舗率も増加傾向にあります。一方で、郊外から中心部に建てられるマンション・集合住宅へ移り住む人もここ最近増加しており、特に30代~40代世代の人口は増加傾向にあります。



▲事業者の退店により大規模空地が存在する
中心商店街

しかしこうした動きは行政サイドの施策によって誘導されているのではなく、中心市街地での居住ニーズが高まっているため起きているものです。

そのため、新たな住民は増えてきていますが、その住民ニーズに応えた都市環境が整備されているかという点必ずしもそうとはいえない一面もあります。

中心市街地の商工業の振興を図りたいと考える地元経済団体、商業関係者、地権者などそれぞれの立場から、商業・景観デザインに配慮しながら中心部の都市環境を改善するための手法を模索するため今回のプロジェクトに取り組みました。

2. 利活用手法の模索

中心商店街の空地・空店舗等の利活用について検討するにあたって3名の主要地権者よりそれぞれヒアリングを行いました。

そのうちの1名は先進的な高齢者福祉施設として注目を集めている「シェア金沢」に習った複合施設整備を行いたいという意向を持たれていまし

空店舗については戦後の建築物が多く特徴的な建物が少ない中で、築 120 年近い建物が空店舗として存在していました。



この店舗に関しては通り面が店舗、奥側に住居という昔ながらの面影を残し、中心商店街から門前町を結ぶ中でも特徴的な建物です。建物の持つ歴史と風情を活かしながらの利活用方法を模索していきました。

先程取り上げた商店街北側から門前町に繋がる

冒頭防府の歴史に触れる中で、「鋳物師町」という地名を紹介しましたが、防府では古来鋳物、鋳鉄を行う職人が多く存在していました。今回のプロジェクトメンバーである松村氏はそうした鋳物のまち防府を今に伝える企業経営者であり、建物のリノベーションを手がける建築家という二つの顔を持っています。



そしてアーケード商店街エリアにこれから求められるのは地域の暮らしを豊かにする生活空間としての機能です。

34

いる箇所もあります。そしてアーケード空間であり、日中の交通規制が設けられていることにより、利用の幅に制限がある状態となっています。

周辺住民が増加している中でこのエリアの都市機能で不足しているのが「憩いの場」すなわち緑地・公園です。こうした機能を持たせていくためには、エリア内での施設整備を行う事業者に開発エリアの一部を緑化するか、あるいは地域に開放し憩いの場としての機能を持たせるなどの提案を行っていく必要があります。

また愛媛県松山市では地元のアーバンデザインセンターが地権者の協力を得ながら遊休地の一次利用として社会実験として緑化を行った事例がありますが、こうした活動を行うことで、エリアに変化を促していくことに繋がるのではないかと考えます。



▲松山市で行われた社会実験の事例

そしてアーケード商店街には、規制を設けることで安全に歩行できる空間という強みがあります。幸いなことに地元行政では、この商店街を含む中心部での賑わい創出活動を奨励するための補助制度を設けており、本来中心商店街が担っていたコミュニティの場所としての交流や、行事ごとが行いやすくなることで、住みよさ、暮らしやすさをより増していけるのではないかと考えます。

3. 最後に

防府市中心市街地では空地の利活用は駐車場になるか、あるいは開発をされてマンションなどの集合住宅になるかという利活用がほとんどでした。

しかしそのエリアで暮らす住人が増えるにつれ

てより良い生活環境、都市環境が求められています。

本来中心商店街が持っていたコミュニティの機能が薄れていく中で、この街に受け継がれてきた歴史・レガシーを残しながら、住みよい・暮らしやすい環境整備を行政・地域住民・民間事業者とともにこれからも対話を重ねる中で見いだしていきたいと思います。